

## 豊かな表現力の育成 ～伝え合う力を高める指導の研究～

### I 主題設定の理由

東山梨地区日本語教育部会では、最近の生徒達の実態を踏まえ、このテーマに設定し、研究を進めることにした。生徒達の様子を見ると、自分自身の気持ちを表現する力や、相手の表現している言動から相手の気持ちを理解する力が、だいぶ乏しいものになっているように感じたからである。その力こそが「伝え合う力」であり、なかでも「言葉」によって表現する力・「言葉」をもとに理解する力こそが、国語科で扱う「伝え合う力」であると考えた。そこで、どのような「言葉」にこだわって教材を選び、どの「言語能力（聞く・話す・読む・書く）」に焦点を絞るかということを中心に話し合いを重ねた。

まず、今年度の方向性を探るべく各校一授業案を発表してもらったところ、「プレゼンテーション」や「聞き取り、自分の考えをまとめ発表」、「討論」といった「話す」「聞く」力に焦点を絞る発表が多く見られた。最近の動向にあわせたものというところであろうか。しかし、その中で「ト書き」を通して「書く」「読む」力をつけさせるという発表があった。「音声言語」か「文字言語」かという違いであろうが、いずれも「自己から発する」力・「他者から受けとる」力には変わりはない。ただ、じっくりと扱うことができるのはどちらかと考えたときに、「音声言語」がその場で消えてしまうのに対し、「文字言語」は何度も見直すことができるため、「伝え合う力」の基礎としては、後者の方がふさわしいのではないかという結論に達した。そこで「ト書き」を使って、「書く」「読む」力としての「豊かな表現力」を追究していくことになった。

### II 研究の内容

#### 1 「ト書き」についての学習会

資料「名脚本家を目指そう！」（山口県宇部市立見初小学校 村田和昌先生）をもとにしながら、「ト書き」の教材としての可能性を探った。「ト書き」とは「台本に書かれる台詞以外の描写説明」のことである。「ト書き」を入れることによって、台本に書かれた台詞をもとにその人物の心情を自分なりに理解する（「読む」）力、そして、その心情にふさわしい描写を表現する（「書く」）力が養われる。そこで前者、特に「読み味わう」ことに焦点を絞っていく方向ですすめられた。ただ読むだけではなく、想像力をふくらませて「味わう」というところに目

を向けたのだ。想像力をふくらませ「行間を読む」ように、台詞と台詞の間にあるものを「読む」力がつくのではないかと考えたからである。

## 2 授業研究と検証

「おれはかまきり」(『のはらうた』工藤直子 昨)

浅川 学 教諭(勝沼中学校 2年)

「ト書き」を入れることによって、それぞれの頭の中に描かれた世界を「言葉」で表現することができていた。実際に生徒達の表現する力には驚かされた次第である。しかも、お互いに評価しあう中で、他の生徒の表現を参考に表現力が高まっていたのも大きな収穫である。その意味ではテーマに迫ることができたといえるだろう。ただし、書き手の視点から「読み」の力を育てるとはいったものの、本当に「読む」力がつく授業であったのか、むしろ「書く」力がつく授業だったのではないか、という疑問もある。さらに言えば、今後の生徒達の「読み」に生かされているかどうか、ということが継続的課題としてあげられる。評価についても課題が見えた。どのような「読み」が優れているのか、どのような表現が優れているのかという判断が難しいものがあるようだ。大きな収穫とともに大きな課題が浮き彫りにされたところである。

## III 成果と課題

### 1 成果として

「読む」という行為には「文章中の言葉により規定されていき、ひとつの意味をなし得るもの」と「文章中の言葉により想像力をかきたてられ、ひろがりを持つもの」があることがわかった。また、「読む」こと・「書く」ことが切っても切れない関係にあることがあらためて確認された。そして、授業を仕組む中で、第三者的な視点を与えることにより、生徒たちの豊かな表現を引き出せる可能性を見出せた。

### 2 課題として

とても基本的なことであるが、上記の成果を元にして、どの教材を選び、どうアプローチしていくことが「伝え合う力」を高めることになるのか、をしっかりと見極めて授業を組み立てていくことが課題であろう。その工夫次第で、生徒たちの力を引き出せるかどうか、決まってくるところがある。また、生徒同士の人間関係、教室の雰囲気などに「伝え合う力」は大きく左右されることもある。普段からの学級経営や生徒への関わり方が、さらに大切になってくるであろう。そして、評価の方法について、やはり課題が残されている。今後の研究課題として、取り組んでいきたい。

(部長 数野 透)